

1 全体図



琉球交易港図屏風

六曲一隻

紙本着色

縦 120.0 cm 横 290.0 cm

19 世紀

浦添市美術館蔵



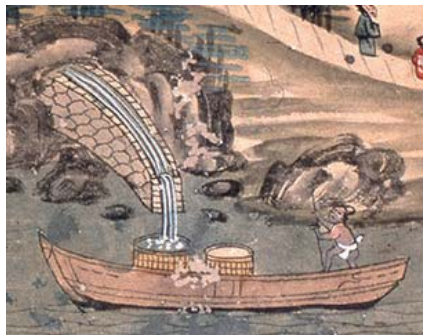
2 落平・御物城



枠内を拡大表示

- 1 落平 ウティンダ
- 2 水売舟
- 3 水桶
- ④ 立って舟を漕ぐ
- 5 漁師 ウミンチュ
- ⑥ 投網する
- 7 魚籠
- ⑧ 座って舟を漕ぐ
- 9 クバ笠
- 10 赤禪
- 11 御物城
おもものぐすく
- 12 白禪
- ⑬ 扇を持つ
- ⑭ 子供を抱く
おうのやま
- 15 奥武山〈地名〉
- 16 龍渡寺（龍洞寺）
- 17 松林
- 18 住吉の松林
- ⑰ 傘をさす

- a 御物城
b 龍渡寺



部分

左上に給水に利用された落平^{ウティンダ}がある。現在の那覇市山下町にあった湧き水で、那覇港に出入りする船舶や港湾の住民にとって貴重な水であった。海に突き出た石樋の下に水売り舟をつけて、桶に水を溜めた。国場川下流（漫湖）から那覇港の出入り口にあたるこの辺りで、サバニに乗った漁師が漁をしている。2人1組で、艫でサバニを繰る人と、舳先に立って網を打つ人がいる。真ん中には獲物を入れる魚籠^{びく}がある。クバ笠を被ったり、赤禪・白禪姿で網を打つ漁師もいる。その下の奥武山^{おうのやま}は漫湖に浮かぶ数個の小島で、王国時代、那覇に入港する船内で疱瘡等の疫病が発生すると、患者はこの場所に隔離さ

れた[小林 2005]。那覇港の入り口から突堤を経て、海に突き出るように石垣で作られた御物城^{おもものぐすく}が見える。創設年は不明だが、1471年刊の朝鮮の地誌『海東諸国紀』[申 1991]に「宝庫」として記載されている。当時盛んだった海外貿易の貿易品収蔵庫で、酒蔵としても使われたといわれている。海外貿易が衰えた近世には荒廃し、1731年の記録によれば「倉屋すでに廃れ、遺址なお存す」という状態であった(『琉球国旧記』[首里王府 2005])。この絵でも、子供を抱く女性が描かれ、すでに公の場所ではなくなっていたことがうかがえる。現在では、那覇港の米軍施設となっている。(小熊誠)

3 垣花・屋良座森城



- | | |
|-----------------|---------|
| 1 坂道 蚊坂（ガジャンビラ） | 9 屋良座森城 |
| 2 垣花（地名） | 10 狭間 |
| 3 橋 スラ場への道 | |
| 4 住吉宮 | a 住吉 |
| 5 松林 住吉の松林 | |
| 6 祠 ミーヌシン | |
| 7 崎原（地名） | |
| 8 イビの前 | |

図の左側は垣花^{かきのはな}のあたり。明治初年の「那覇読史地図」（〔球陽研究会 1974〕所収）には、スラ場から上る道の南側に湖城村、北側に儀間村で、垣花はこれらの汎称という（『南島風土記』〔東恩納 1950〕）。垣花は、遊里渡地に近く、小禄・豊見城とともに琉球餅の主産地として知られ、住民はほとんど農業を営まず、漁労・船頭などを生業にする者が多かったという（『南島風土記』など）。各家は草葺きで、たたずまいは農村的である。「落平」（図 1）から、垣花に至る海岸沿いの道は、「那覇読史地図」には見えない。図の中央は、儀間村の北部、住吉の地。住吉宮は、1709 年に作成された『那覇由来記』（〔那覇市企画部市史編集室 2004〕所収）に引用される、1659 年再興の棟文に住吉大明神とあり、はるかに首里城を望む絶景の地という。社前を

右に、300 メートルほどの浮道を行くと屋良座森城^{やらざもり}がある。那覇港南側の砲台で、北の三重城とともに海上防備にあたった。1553 年完成（『中山世鑑』〔首里王府 2011〕）。図では砲台などは見えないが、攻撃用の狭間^{さま}がある。狭間は日本の場合、縦長の四角いものは弓矢用といわれる。古琉球期には三重城とともに倭寇を撤退させ、1609 年の島津氏の琉球侵攻の際にはその侵入を阻止したといわれる。ミーヌシンは「目之心」とあり、岩穴が前後 2 つあって、前には正観音像を安置し、賓頭盧も祀る。拝殿は「運貨漕之諸船頭」が建立したという。後の岩穴にも賓頭盧が祀られるが、信仰する者はいなかった（『琉球国由来記』〔外間・波照間 1997〕）。その先の崎原は那覇港の入口である。（得能壽美）



枠内を拡大表示

4 帰国する進貢船



枠内を拡大表示

- 1 中型船 ^{マールン} 馬艦船
- 2 中型船 大和船
- 3 中型船 馬艦船
- 4 無人島 大いふ（ナガンヌ）
- 5 無人島 小いふ（クエフ）
- 6 無人島 神山
- 7 慶伊瀬島 慶伊干瀬（チービシ）
- 8 五色旗
- 9 三角旗
- 10 三角旗
- 11 むかで旗 モカズ旗
- 12 七つ星旗
- 13 日の丸旗
- 14 船旗
- 15 帆（頭巾頂？）
- 16 本帆
- 17 舳先旗
- 18 舳先の装飾
- 19 砲煙
- 20 大型船 帰唐船
- 21 中型船 馬艦船
- 22 中型船 馬艦船

中国から帰国する進貢船を帰唐船と呼ぶ。琉球船の出入港地であった福建省の福州と那覇を往来する進貢船には、海賊対策のために薩摩藩から借用した鉄砲と大砲（石火矢）が積み込まれていた。大砲は本来、海賊への応戦・撃退を目的とするものであったが、海上で邪氣を払う際や出入港の際に空砲を放つことが慣例となっていた。後者の空砲は、港内への曳き舟（曳航船）を要請する合図であった。

那覇から約15キロメートルの沖合に3つのサンゴ礁の小島がある。その総称をチービシと呼び、慶島、慶伊瀬島とも表記される。チー・ビシは慶（慶伊）・

干瀬に当たる。三島では大いふ（ナガンヌ）島が長さ約1キロメートル弱で最大、それに次ぐのが神山島、最小は小いふ（クエフ）島である。いずれも平坦でほぼ砂州からなっているため居住は困難で、現在においても無人島のままである。ただし、チービシ付近は古くから魚介類や海苔が豊富な漁場であった。そのため1676年に神山親雲上^{ペー・チン}なる人物が首里王府へ銭100貫文を上納して、チービシの用益権を得ていた。その後（年代不明）、同額の上納銭で用益権は渡嘉敷島^{トカシマ}の前慶良間村に移った。（豊見山和行）

5 進貢船（帰唐船）



福州から帰国する進貢船（帰唐船）の那覇入港を中心とした場面が描かれている。船に掲げられた「捧旨帰国」（「奉旨帰国」）旗は、中国皇帝の許可（旨）を得て帰国することを表している。帰唐船が港内へ入港するために多数の小舟によって曳航されている様子や薩摩役人の乗る伝間船が帰唐船へ向かう場面も見られる。帰唐船の入港時には、抜け荷（密輸）防止のため、小舟など民間船の航行は厳禁とされていた。帰唐船の貿易品監視のため薩摩役人らの乗る小舟だけがいち早く帰唐船へ乗りつける規定であっ

た。本図とほぼ同じ構図で描かれた「琉球貿易図屏風」（参考図版Ⅰ）では、薩摩役人の伝間船の船旗（丸に十文字）の下方に「唐物方」とある。唐物方は琉球に設置された薩摩藩の対中国貿易の部署で、1844年に「産物方」と改称された。なお、本図では帰唐船の周辺に小舟や屋形船、さらに船漕ぎ競漕の場面も描かれているが、異なる時期の場面が同時に描かれたものと思われる〔豊見山 2004a・b〕。（豊見山和行）



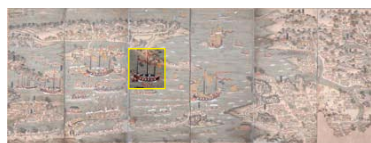
- | | | |
|---------------|---------------|--------------|
| 1 小舟 サバニ | 11 小舟 伝間船 | 21 三線 サンシン |
| 2 大型船を曳航する | 12 櫓 | 22 三線を弾く |
| 3 大型船 進貢船 | 13 櫓を漕ぐ | 23 酒を注ぐ |
| 4 弥帆 (前帆) | 14 薩摩役人 唐物方役人 | 24 杯を差し出す |
| 5 舳先旗 | 15 扇子 | 25 湍標 みう木 |
| 6 三角旗の竿 唐竹竿 | 16 船旗 (丸に十文字) | 26 帆 網代帆 |
| 7 帰国旗 「捧旨帰国」旗 | 17 木 梶 | 27 釣竿 |
| 8 本帆 | 18 見物人 | 28 面を被る |
| 9 太鼓を叩く | 19 屋形船 流れ船 | 29 笊 (食べ物入り) |
| 10 太鼓 | 20 赤覆面 | 30 旗頭 (刀型) |
| | | 31 湍田の旗頭 |
| | | 32 三重城 ミーグシク |
| | | 33 スボン |



枠内を拡大表示

- a 旨捧帰国
b 三重城

6 唐船



枠内を拡大表示

- 1 御紋旗 左巴御紋（ヒジャイグムン）
- 2 船旗
- 3 艦の装飾（鳳凰の図）
- 4 艦の装飾（人物の図）
- 5 舵
- ⑥ 銅鑼を打つ
- 7 銅鑼
- 8 艦櫓
- 9 七つ星旗
- 10 むかで旗 モカズ旗
- 11 三角旗
- 12 三角旗
- 13 本櫓
- 14 五色旗
- 15 日の丸旗
- 16 弥帆櫓
- 17 天幕 幕屋
- 18 舳先旗
- ⑨ 子供を抱く
- 20 大型船 唐船（トーシン）

琉球国の公船（官船）は中国のジャンク系統に属し、当時にあつては船身約 45 メートルの大型船も建造されていた。中国（明）との朝貢関係成立（1372 年）以後、琉球は明から大型船を約 1 世紀以上にわたって無償で支給されていた。その後、自前でジャンク系統の大型船を建造するようになり、近世の琉球公船はそれに由来する。近世期に那覇と中国福州間を往来した船舶は、渡航形態によって渡唐船（進

貢船）、接貢船、（遭難民）護送船と呼称された。同じ船が那覇と鹿児島間を往来する際には、海賊対策の大砲を取り外し、船名は檣船と呼ばれた。18 世紀初頭から渡唐船と同型ではあるが、民間商船として馬艦船が登場するようになる。本図の船は「御紋旗」が掲げられていることから官船であることが分かる。（豊見山和行）

7 接貢船



中央の「接貢」旗を掲げるジャンクタイプの船舶は、接貢船と呼称された。明末から清代には、琉球から中国福州へ進貢船2艘を隔年で派遣する2年1貢体制が確立していたが、貿易回数を増やすため琉球は1660年代頃から進貢の空白年に接貢船1艘の派遣を割り込ませ、毎年貿易することを可能とした。その接貢船と周辺の大和船に琉球人や薩摩人(船頭・水夫)が入り交じってハーリー(船漕ぎ競漕)を見物する場面が描かれている。大和船に乗船した赤衣着物の女性は遊女と目される。尾類^{シユリ}と呼ばれた遊女らは、那覇港に近接した辻、仲島、渡地に接待所兼

遊郭があった。彼女らは単身赴任してきた薩摩の在番奉行や船頭らの身の回りの世話や商売にも携わった。接貢船の背後の出島は地名では君南風と呼称され、唐船作事場(すら場)も立地していた。そこには久米島の神職・君南風を遙拝する拝所があった。毎年、進貢・接貢船の出航前には首里王府から久米島の君南風へ航海安全祈願の供物が送付された。この場面は唐船作事場に航海安全祈願の宗教施設が設置されていたことが分かるものとして貴重である。(豊見山和行)



- 1 大型船 大和船
- 2 さがり
- 3 弥帆柱
- 4 赤禪
- 5 苦緒 はすお
- 6 帆摺管 ほすくわん
- 7 遊女 ジュリ
- 8 表垣立
- 9 船旗 (丸に十文字)
- 10 帆摺れ
- 11 大型船 接貢船
- 12 舳先の装飾 (獅子の図)
- 13 弥帆櫓
- 14 日の丸旗
- 15 五色旗
- 16 天幕 幕屋
- 17 本櫓
- 18 接貢旗
- 19 三角旗
- 20 むかで旗 モカズ旗
- 21 三角旗
- 22 七つ星旗
- 23 船旗
- 24 銅鑼を打つ
- 25 銅鑼
- 26 撥
- 27 小舟 サバニ
- 28 クバ笠
- 29 櫓
- 30 櫓を漕ぐ
- 31 傘
- 32 子供を抱く
- 33 子供を背負う
- 34 天幕 幕屋
- 35 造船所 (唐船作事場) すら場、すら所
- 36 君南風 (地名) チンペー
- 37 君南風遙拝所
- 38 旗止め具？

a 接貢



枠内を拡大表示

8 ハーリー (船漕ぎ競漕)



- 1 小舟 ハーリーブネ (久米村)
- 2 日の丸旗
- 3 鉦 ハーリーガネ

- 4 鉦を打つ
- 5 旗を持つ
- 6 櫂を漕ぐ

- 7 被り物 赤冠
- 8 白鉢巻
- 9 三角旗

3艘のハーリー舟（爬龍舟）による船漕ぎ競漕を中心として描かれている。那覇港内でのハーリーは、泊村・久米村・那覇の3艘で競われた。ハーリーは本来、雨乞い祈願の祭礼（ウガンバーリー）を主として毎年、旧暦5月4日（ユッカヌヒー）に行われていたが、しだいにその本旨は薄れ、1740年代頃には若者達の勝負事のようにになっていた。その

ため、時にはケンカに発展することもあった。泊村舟は黒色の船体で漕ぎ手は後鉢巻、久米村舟は黄色の船体で漕ぎ手は向鉢巻、那覇舟は緑色で漕ぎ手は陣笠を被る、というように揃いの出で立ちであったことが絵図から分かる。見物人は首里・那覇の者たちだけでなく、那覇周辺の田舎からも老若男女が大勢くり出し、幕屋（テント）や棧敷などを設営して



10 赤鉢巻

11 舵

12 船旗「とまり」旗

13 舳先飾り

14 船尾飾り

15 小舟 ハーリーブネ (泊村)

16 小舟 ハーリーブネ (那覇)

17 陣笠

a とまり

見物した。陸上からだけでなく、若者や遊女たちも多数の小舟に乗り込み、思い思いに鉦や鼓を打ち鳴らして声援を送ったり、歌三線などの余興も見られたとされる。飛沫をあげて力漕するハーリー舟と周辺の小舟や陸地から声援を送る見物人で喧騒を極めていた様子が伝わってくる場面である。(豊見山和行)



枠内を拡大表示

9 三重城



枠内を拡大表示

10 迎恩亭



枠内を拡大表示



部分①

- 1 帆柱
- 2 帆摺れ
- 3 弥帆柱
- 4 船旗（丸に十文字）
- 5 天幕 幕屋
- 6 遊女 ジュリ
- 7 吹き流し？
- 8 さがり
- 9 薩摩の御用船（弁才船）
- 10 団扇
- 11 小舟
- 12 艫を漕ぐ
- 13 艫
- 14 赤禪
- 15 臨海寺 沖の寺
- 16 僧侶 ボージ
- 17 碑
- 18 大橋
- 19 荷を運ぶ
- 20 箱
- 21 小橋
- 22 屋形船 流れ船
- 23 旗頭（矛型）
- 24 吹き流し
- 25 幕
- 26 赤鉢巻
- 27 三線 サンシン
- 28 鶏の面
- 29 赤覆面
- 30 歌舞
- 31 箱（食事と酒？）



部分②

- | | |
|-------------|--------|
| 32 迎恩亭（通堂屋） | 40 駕籠 |
| 33 迎恩亭の門 | 41 籠 |
| 34 水桶？ | 42 日本刀 |
| 35 薩摩役人 | |
| 36 紋付袴 | |
| 37 丁髷 | |
| 38 酒と煙草？ | |
| 39 荷 | |

1609年の琉球侵攻後、薩摩藩は琉球間のヒト・モノの動きを統制下に置いたため、琉球へ渡航できる日本人は①藩から琉球監督のために派遣され那覇に駐在する在番奉行衆20名ほどと、②藩の委託を受けて琉球の年貢米・砂糖などを運送し、代わりに琉球で商売を行う薩摩船の乗組員（船頭・水主など）にほぼ限られるようになった（本書第2章・図36の解説も参照のこと）。この絵の中央には、日本の弁才船タイプの船が並んで停泊しているが、前述の状況と船尾の旗印から薩摩藩の御用船（兼、商船）と考えられる。船上には薩摩人と談笑する遊女が描かれ、船の側には薩摩船に向かうとみられる遊女の乗る小舟も描かれている。

画面左下（部分②）には、中国皇帝の使者である

冊封使が渡来した際の上陸地である通堂崎がある。迎恩亭（通堂屋）と呼ばれる休息所で、在番奉行衆と見られる薩摩役人の一行が、琉球側のもてなしを受け、ハーリー競漕を見物している。その上に描かれた赤い小舟は貸し切りタイプの遊覧船であろう。東恩納寛博『童景集』[東恩納1978]には、3月3日の節句について、「遊興の主眼は流れ船と唱へ遊船で、屋根船を一艘雇切り、幕を張り、御馳走を散々持ちこみ、ここでも亦鼓を乱打してはやし立て唄ひぬく」と説明されている。同様の船であろうか。本図では鶏の面や赤い布による覆面姿で、三線に合わせて扇子を振り、楽しむ様子がうかがえる。（真栄平房昭・本村育恵）

11 渡地



枠内を拡大表示

- 1 硫黄城 ユーワグスク
- 2 渡地〈地名〉 ワタンジ
- 3 宮古蔵 ミャークグラ
- 4 船手蔵（船手座）
- 5 遊女 ジュリ
- 6 渡地遊郭
- 7 小舟
- 8 思案橋
- 9 唐船小堀 トーシングムイ
- 10 通堂〈地名〉 トウンドオー
- 11 新湊那覇江碑
- 12 薩摩役人
- 13 荷を担ぐ
- 14 白禪
- 15 箱（食事？）

- a 硫磺城
- b 渡地
- c 船手

那覇港北岸付近（東町から渡地^{わたんじ}）が描かれている。渡地の地名は、対岸の垣花へ「渡し」があったことによるとされる。思案橋によって東町と結ばれ、中国への進貢品である硫黄を貯蔵する硫黄城、宮古・八重山からの貢租を収納・管理する宮古蔵、公船の製造・修繕や船材の格納出納をつかさどる船手蔵、渡地遊郭などが置かれ、手前には琉球の公船や冠船（冊封使の船）の修理を行う唐船小堀があった。思

案橋は、遊郭への通り道にあったためにこの名がつけられたという。この図でも遊郭とみられる建物のそばに遊女が描かれている。画面左下は通堂の石灯籠、右下は1717年に行われた那覇江浚渫工事の竣工を受けて建立された碑と見られる。現在、碑の残欠が沖縄県立博物館に所蔵されている。（真栄平房昭）

12 西の海



那覇の辻村の西の海一帯の部分。絵の中央部分の屋形船に、肝入に誘導されて2人の遊女（赤い衣裳は遊女を表す）が乗り込もうとしている（部分①）。その船での遊興のための酒肴を天秤棒で運んできた下男がいる（部分②）。屋形船では遊女の品定めか、幕の下から顔を覗かせている男共がいる（部分③）。海岸沿いに勢いよく炎を上げている灰焼き窯が見え

ている。灰焼き窯とは、貝や珊瑚片などを焼いて船舶用の塗料の石灰を製造する窯のことで、こうした灰焼きは1731年以降、中国人漂流民から技術を学んで各地に設けられたとされている。海岸の岩場の突き出た部分に杭らしき物が立てられているが、これは浅瀬の存在を示した落標^{みおつけし}と推測される。那覇港のあちこちに見られる。（田名真之）



部分①



部分③



部分②

- 1 屋形船
- 2 日の丸旗
- 3 旗頭
- 4 船頭 シンドウ
- 5 櫓
- 6 幕の下から顔を覗かせる
- 7 遊女 ジュリ
- 8 肝入
- 9 下男
- 10 赤禪
- 11 桶 ターグ
- 12 箱
- 13 灰焼き フェータチ
- 14 潮の崎〈地名〉 スーヌサチ
- 15 長浜〈地名〉
- 16 漂標 みう木

a バクチャ（博奕屋） バクチャヤー



枠内を拡大表示

13 波の上・若狭



枠内を拡大表示

波の上から若狭海岸にかけての部分。波上宮や護国寺、天尊廟などがある。この一帯の海岸線は波の上、上の毛、雪崎と丘陵が連続し、各々の先端が崖となって海に突き出していた。波の上は景勝地として、冊封使録中の「中山八景」に「筍崖夕照」としてあげられている（徐葆光『中山伝信録』〔徐1999〕、周煌『琉球国志略』〔周2003〕など）。波上宮は琉球最高の社格を誇る神社で、創建年は不明だが、16世紀以前に成立していたとされている。

14 湯原



枠内を拡大表示

- 1 馬場 ウマイー
- 2 競走馬 ウマスーブ／ウマズリー
- 3 手綱
- 4 下鞍
- 5 しりがい
- 6 馬の耳（たてがみ？）
- 7 向鉢巻
- 8 後鉢巻
- 9 速足 アシクマスン
- 10 子供を抱く
- 11 傘をさす
- 12 扇を持つ
- 13 沼井台 デーグァー
- 14 苫 カマス／カマジ
- 15 さら
- 16 桶 ターグ
- 17 クバ笠
- 18 万鋤（浜曳） クルバシ
- 19 よせ ユシ
- 20 はらいたけ ハボウキ
- 21 塩田に撒いた砂を均す
- 22 塩分が付着した砂を集める（集砂）
- 23 砂に筋目を入れて乾燥を促す（爬砂）
- 24 茅葺き カヤブチャヤー
- 25 瓦葺き カーラヤー
- 26 王府役人主従
- 27 駕籠かき
- 28 傘持ち
- 29 槍持ち
- 30 挟み箱持ち
- 31 泉崎橋 イジュンザチバシ
- 32 美栄橋 ミーバシ
- 33 七星山 ナナチバーカー

那覇の東海岸、潟^{かたばる}原を描いた部分。北は川向^{とまり}こうの泊村、東は上が久茂地村、下が泉崎村である。潟原は干潮時には広い干潟が出現する。そこで古くから製塩が行われ、また馬勝負（琉球式の競馬）が行われた。馬勝負は何頭もの馬が右に左に歩を進めている。見物人も様々で老人から女、子どもまで楽しんだ、那覇地区の一大イベントであったことが分かる。なお、干潟を利用した製塩法は薩摩から導入され、1694年に潟原で始まったとされる。首里、那覇の大消費地を控えた生産地として、元禄期には年間400石を産したという。画中では、製塩作業の各工程が描かれている。潟原の傍らの石積みには、

塩田に撒くための砂が積載され、雨による流出を防ぐために苫で覆われている。

さて、画中右側に上から下へ3つの橋が描かれている。上が崇元寺の前に架けられた三連のアーチ橋の安里橋（現在は崇元寺橋）、それに続くのが美栄橋、そして駕籠に乗った王府の高官の一行が渡っている泉崎橋となる。何れの橋も創建年は不明だが、安里橋と美栄橋は15世紀中葉の長虹堤建造の際に架けられた3橋の内ともされている。泉崎橋ともども18世紀初頭に新造されている。なお、泉崎橋近辺は「中山八景」に「泉崎夜月」として橋に懸かる月の景色があげられている。（田名真之・儀間淳一）

15 崇元寺



枠内を拡大表示

- 1 茶湯崎^{ちや とう ざき ばし} チャナザチバシ
 - 2 大道^{だいどう}松原
 - 3 大道毛之碑文 ウフドーモーのひもん
 - 4 傘をさす
 - 5 馬で駆ける
 - 6 八幡^{はちまん ぱし}虹^{こう}
 - 7 崇元寺 スーギージ
 - 8 崇元寺の石門
 - 9 崇元寺前の下馬碑
 - 10 安里^{あんさと}橋^{はし} (崇元寺橋)
 - 11 外に座って涼む
 - 12 クバ扇
 - 13 象棋 (中国将棋) チュンジー
- a 大道^{だいどう}
- b 崇元寺



部分

右上から大道^{だいどう}の坂を下り、崇元寺^{そうげん じ}に至る。坂道には横線が引かれ、奥行きの長い琉球式の階段になっていたと思われる。坂道の両側には人家は見られず、松が点在している。戦前まで、首里にのぼる道はうっそうとした松で覆われ、夜その道で肝試しをしたという。坂道を歩く人は様々で、扇子をあおぐ人、傘をさす人、馬で駆け下る人などが見える。坂道は、弁^{べん}が嶽^{だけ}を源流とする儀保川^{ぎほ} (ジープガー) と数か所で交わり、石造りの橋がかかっている。安里^{あんさと}川にかかる安里橋は、規模が大きく、2本の石の橋げたが見える。橋のたもとには崇元寺の三連アーチ型の石門があり、そこから中に入ると、第二門である前堂を経て、いくつかの建物があり、一番奥に正廟が見

える。崇元寺は、王家^{しやう} (尚氏) の廟所であると同時に歴代国王の霊位を祀る国廟であったため、尊敬すべきものとして、石門前左右の下馬碑には、「士庶ともにここにて馬から降るべし」という内容が刻まれている。ここに描かれた西碑は沖縄戦で失われたが、東碑は今もその場に現存する。崇元寺横の広場には、外で涼む人々が描かれている。2組の男性が興じているのは中国将棋の象棋 (チュンジー) だろうか。広場から左へ伸びる道は、泊高橋に至る道で、数軒ずつ石垣で囲まれた民家が続いている。道には、子を抱く女性の姿が見え、女性の着物には帯は巻かれていないようだ。(小熊誠)

16 泊村



とまりむら
泊村（現在の那覇市泊および前島）および首里の一部を描いた部分である。中山の外港であった泊港には、奄美諸島からの貢物を納める船が入港した。13世紀、こうした貢物を納める公館（泊御殿、トマリウドン）と公倉（大島倉）が聖現寺の所在地に建てられた。以後、物資の集散地として船や人が集まるようになり、村が成立した。15世紀後半



枠内を拡大表示

に臨済宗の寺として聖現寺が開山し、1671年より護国寺の住持頼昌によって真言宗となった。泊港に注ぐ安里川の河口に造られた泊高橋は、当初は木造であったが1700年に石橋に改修され、これを記念して橋のたもとに石碑が置かれた。18世紀中葉に、防波堤として石垣を備えた大道（泊前道）が造られ、さらに中道・赤平道が整備され、崇元寺橋（安里橋）へ続いていった。近世には、泊村は首里・那覇・久米とともに町方（都市部）の一部を形成し、泊頭取を筆頭に、泊村に戸籍を持つ士（士族）が村内の政務を掌った。

また画面上方には首里北部の末吉付近が描かれて



部分

- 1 末吉宮本殿
- 2 末吉宮拝殿
- 3 烽火台？
- 4 百姓の家（茅葺き）
- 5 遍照寺（万寿寺）
- 6 チャーギ（イヌマキ）道
- 7 松林
- 8 泊村〈地名〉
- 9 土の家（瓦葺き）
- 10 聖現寺
- 11 台瀬〈地名〉
- 12 天久宮
- 13 泊前道 泊メーミチ

- 14 泊高橋碑
- 15 泊高橋
- 16 泊港
- 17 琉球船（小型の山原船？）
- 18 前島〈地名〉
- 19 徒渡り
- 20 中国人漂着民の収容所
- 21 見張り小屋
- 22 僧侶主従
- 23 中国人（清人）漂着民
- 24 帽子（つば付き）
- 25 弁髪
- 26 清服①（長袖・長ズボン・袖なし上着）

- 27 琉球人僧侶と中国人が会話する
- 28 靴？
- 29 清服②（長袖上着・長ズボン）
- 30 煙管
- 31 煙草入れ？
- 32 帽子（つばなし）
- 33 清服③（巻頭衣）
- 34 クバ扇

- a 杜壇（壇）
b 天久之寺 アミクヌティラ

いる。末吉宮は琉球八社の一つで、首里城の北方にあった。本殿・拝殿・祭場があり、計21段の石造の階段（磴道）で結ばれている。また拝殿と祭場の間にはアーチ門があった。その下方に遍照寺（万寿寺）があり、俗に「末吉の寺」と呼ばれた。

部分図は、泊村の聖現寺付近に仮設された中国人漂着民の収容所の様子である。近世において琉球各地へ漂着した中国人（清人）は、泊村へ転送され、ここから渡唐船で中国まで送還されることが多かった〔渡辺 2003・2005〕。その史料上の初見は1718年である。また朝鮮人など西洋人以外の外国人漂着民も、同様に泊村へ転送され、中国経由で自国へと送還された。漂着民は石垣の囲いの中に臨時に設け

られた仮小屋に収容され、王府の保護を受けた。当時、琉球では日本との関係を中国（清朝）に対して隠蔽する政策が採られていたことなどから、漂着民は厳重に出入りを監視・管理され、一種の軟禁状態にあった。ただし琉球の役人が付き添う形で、養生のための散歩などは適宜行われていた。この絵には、周辺の琉球人とは異なる民族衣装や髪型をした清代の中国人漂着民が仮小屋に滞在し、周辺を歩いたり琉球僧と会話をしたりする様子が生き生きと描かれている。屏風とはいえ、沖縄本島に漂着した中国人を描いた唯一の絵で、当時の様子がうかがえる貴重な史料である。（渡辺美季）

17 首里城

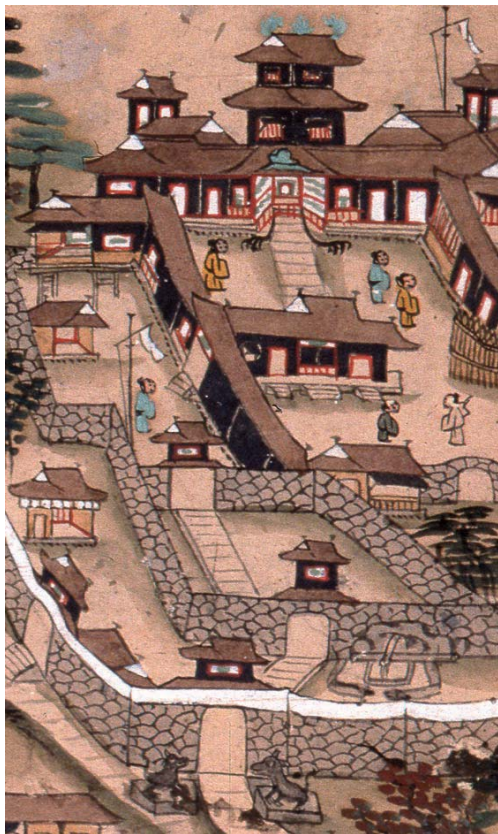


枠内を拡大表示

- 1 正殿
- 2 唐破風 カラファーフ
- 3 浮道
- 4 番所
- 5 首里森御嶽 シュリムイウタキ
- 6 北殿
- 7 御庭 ウナー
- 8 奉神門
- 9 下之御庭
- 10 広福門
- 11 漏刻門
- 12 瑞泉門
- 13 龍樋
- 14 右脇門
- 15 久慶門
- 16 飲会門
- 17 獅子の石像 シーサー
- 18 守礼門
- 19 中山門
- 20 子供を抱く
- 21 木陰に座り談笑する
- 22 円覚寺龍淵殿
- 23 仏殿
- 24 鐘樓
- 25 鐘
- 26 獅子窟
- 27 山門
- 28 円覚寺総門
- 29 仁王像(阿吽) ニオーブトゥキ
- 30 円鑑池
- 31 天女橋
- 32 弁財天堂
- 33 観音堂

a 観音堂

首里城付近を描いている。城門・石垣などの描写は平面的でおどなりであるが、現在も残り、丘から湧き出る水を吐き出す瑞泉門横の龍樋や、多くの首里城俯瞰図にある飲会門前の巨大な獅子像は描かれている。首里城などの石垣は表現されているが、中山門から城へと通じる石畳の長い坂道は、ほかの道同様に、横木を配した描写となっている。首里城の左側には琉球における臨済宗の総本山・円覚寺があり、総門と左右の脇門・中門・鐘樓などが描かれるが、今も残る放生池は描かれていない。円覚寺の総門には阿・吽の仁王様らしき像が見える。円覚寺や首里城の大部分は沖繩戦で破壊され、建築物の壁は戦後、鮮やかな朱色で復元



部分

されたが、本図では首里城の壁は黒を基調に描かれている。円覚寺前には、首里城周辺から湧き出た水をたたえた円鑑池があり、中之島の弁財天堂、堂へ渡る天女橋も描かれている。円鑑池下部に「観音堂」(慈眼院観音堂)が大きく描かれているが、実際この付近にあるのは円鑑池からの水を落とした龍潭と、園比屋武御嶽である。首里城と周囲は、他の絵画からの引用や典型的な図像で描かれ、現実の景観と矛盾が生じている。しかし本図の首里城付記の描写は、本作と類似点が多い「琉球貿易図屏風」(参考図版Ⅰ)と比べれば、詳細である。(富澤達三)

参考図版 I



琉球貿易図屏風

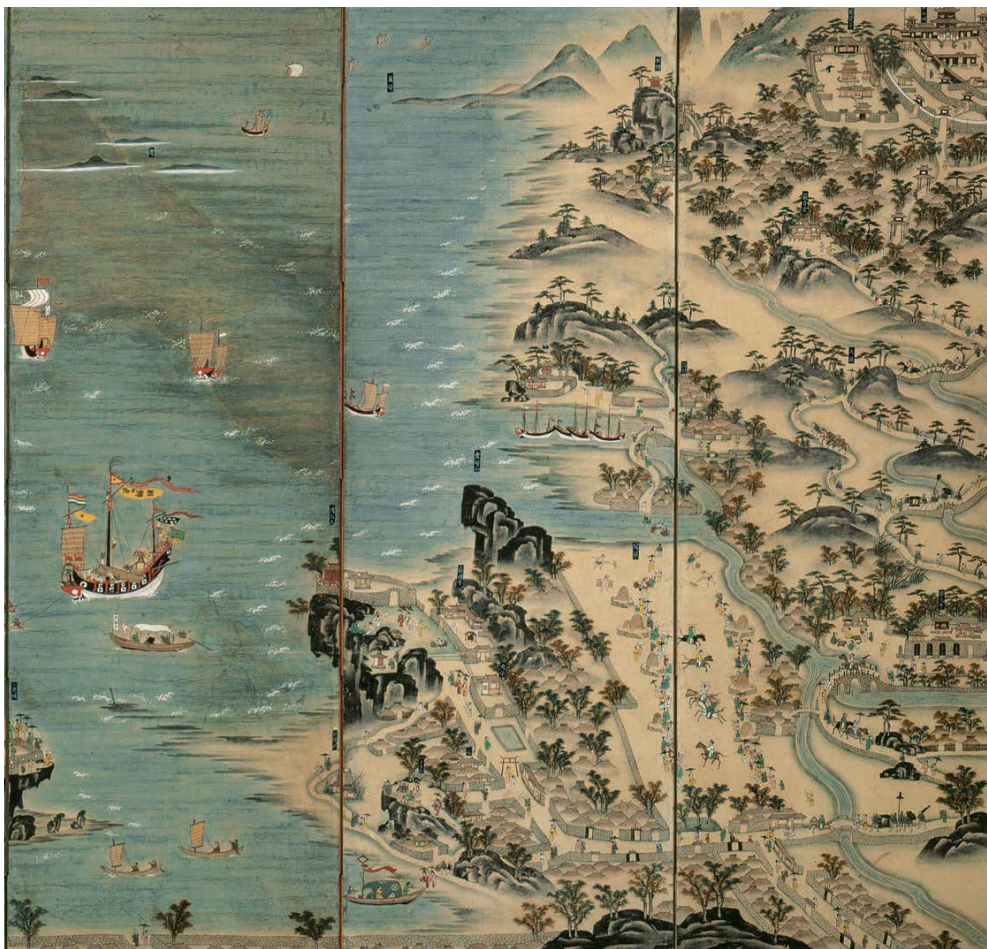
六曲一隻

紙本着色

縦 175.0 cm 横 343.6 cm

19 世紀

滋賀大学経済学部附属史料館蔵





参考図版Ⅰ 左



参考図版Ⅰ 中央



参考図版Ⅰ 右



部分①（中央）



部分②（右）



部分③（左）



部分④（右）

参考図版Ⅱ



琉球進貢船図屏風

六曲一隻

紙本着色

縦 94.5cm 横 255.0cm

19 世紀

京都大学総合博物館蔵





参考図版Ⅱ 左



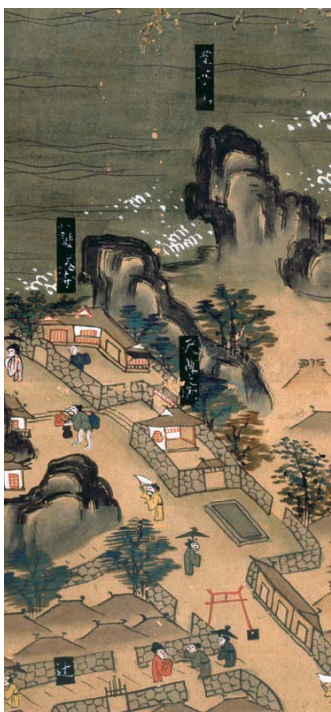
参考図版Ⅱ 中央



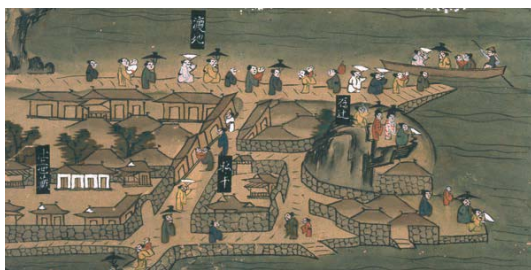
参考图版Ⅱ 右



部分①（中央）



部分②（右）



部分③（左）



部分④（右）

参考図版Ⅲ



琉球交易港図 三幅（掛軸装）

紙本着色

（左）縦 107.6cm 横 55.1cm （中）縦 106.7cm 横 55.0cm （右）縦 104.0cm 横 53.8cm ※修復前

（三幅共）縦 111.6cm 横 55.7cm ※修復後

19 世紀

浦添市美術館蔵





参考図版Ⅲ 左



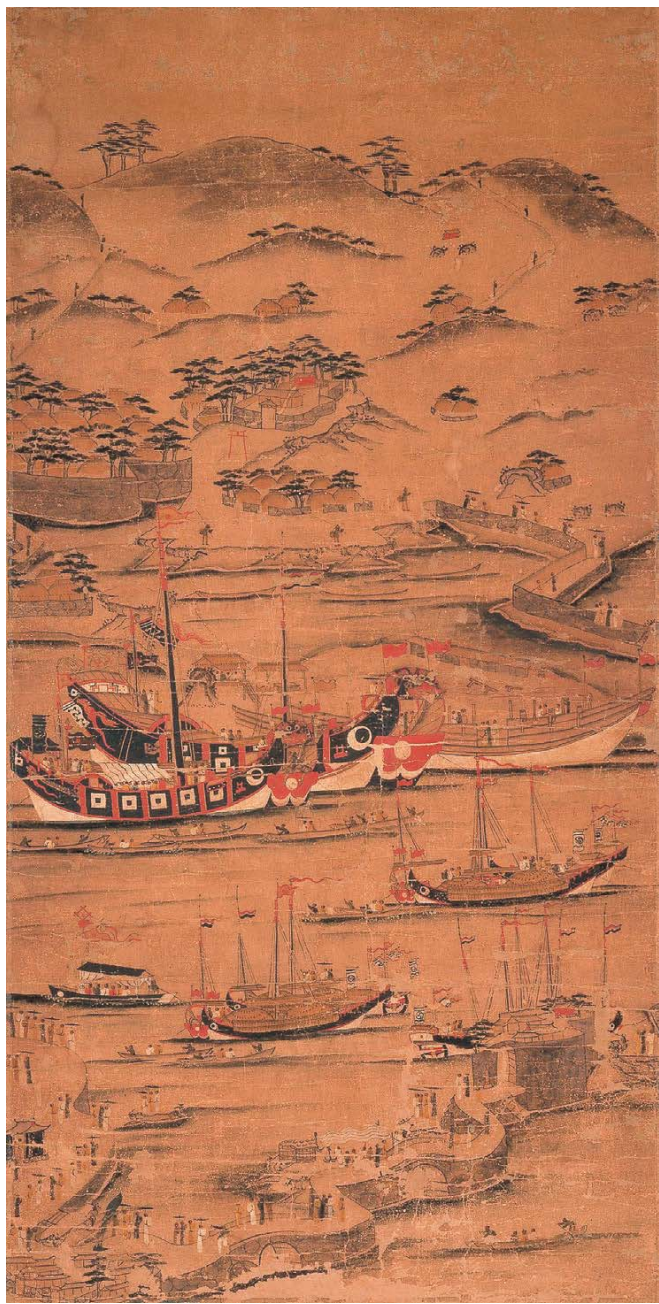
部分①（落平）



部分②（水売船）



部分③（御物城・ハーリー）



参考図版Ⅲ 中央



部分④（すら場）



部分⑤（官船）



部分⑥（臨海寺）



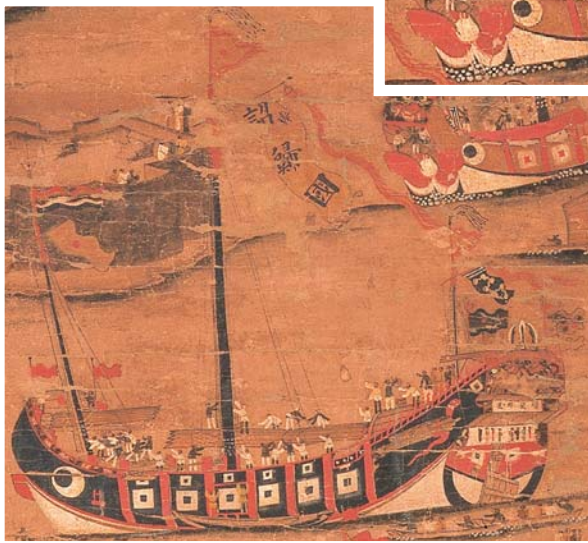
参考图版Ⅲ 右



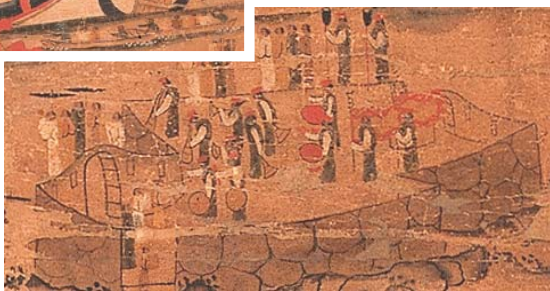
部分⑦（冠船 1）



部分⑧（冠船 2「奉旨冊封」）



部分⑨（進貢船「捧詔帰国」）



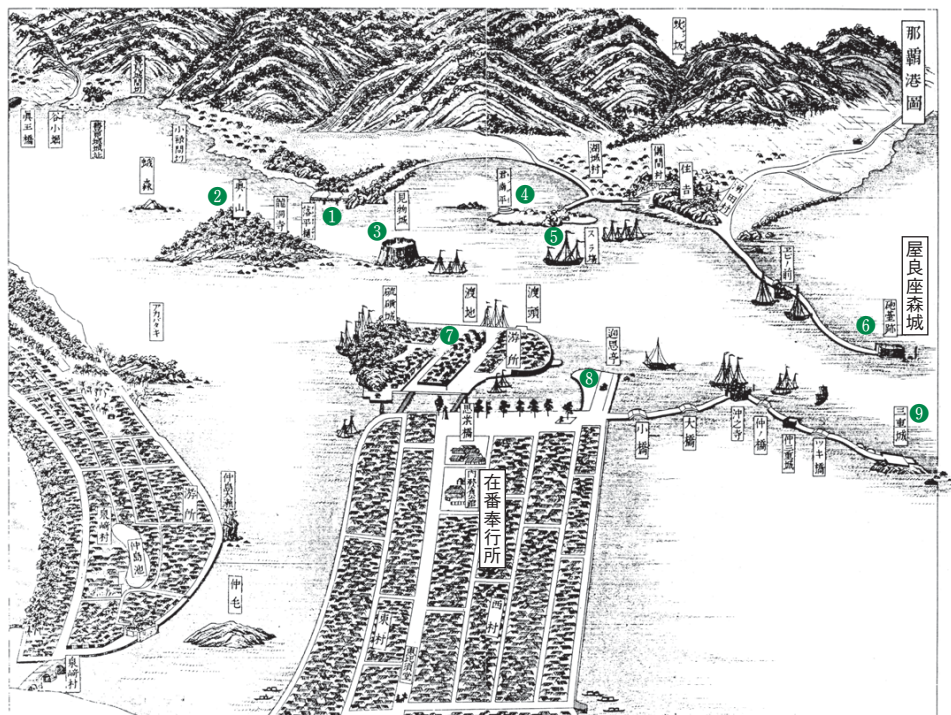
部分⑩（三重城）

参考地図

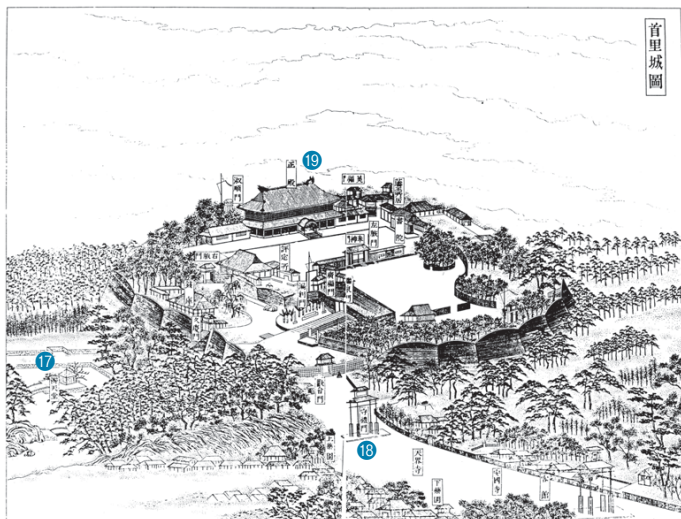
(伊地知貞馨『沖縄志』1877年刊より)



I 那覇港図



Ⅲ 首里城図



Ⅱ 那覇及久米村図

